

二十世紀初頭の名古屋論

——横山健堂の『新人国記』をめぐって——

羽賀祥二

はじめに

- 一 明治の人物評論と横山健堂
- 二 『人国記』と『新人国記』
- 三 「中京」としての名古屋
- 四 中京の教育
- 五 一大工業地としての中京
むすびに

はじめに

本稿は横山健堂という明治後期から昭和初年にかけて活躍した人物評論家・教育史家の名古屋論、教育論を検討する。二十世紀にはいつて名古屋は大きな転換期を迎えていた。その変化を象徴する出来事が一九一〇年に開催された第十回関西府県連合共進会であった。日露戦争後、名古屋の現状と将来を論ずる多くの都市論が出現した。横山が一九一一年五月に敬文館書店から出版した『新人国記』もその一つとして挙げる事ができるだろう。この書は京都・大阪・中京・上州・信州・常陸・大和の七か所を対象とした地域論で、中京の部は外部の眼から見た名古屋論である。この書が重要なのは、二十世紀初頭の名古屋の歴史と現状そして将来を、他都市・他地域と比較しつつ考察できる点にある。

この『新人国記』は当時広く世の中に受け入れられ、愛読された。明治の教育家として著名な沢柳政太郎は『新人国記』について、次のように述べている。¹

日本人に日本人の性格あり、英国人に英国人の特色あるが如く、東北人に東北人の特色あり、九州人に九州人の性癖あるは疑を容れず、而して其の長は之を存養して、其短は之を刈除せんことを努むるは、政治上より觀るも、教育上より考ふるも甚だ必要の事に属す、唯だ其の性格特質の何たるを正当に觀察記述すること容易に
あらず、人国記は今尚ほ吾人の参考して益を得ること尠なからざるもの、健堂君の新人国記は更に新資料を供
す

横山の『新人国記』は江戸時代に出版された『人国記』を継承した書物だった。それぞれの地域がそれぞれ特有

の人格を生み出すという観点から両書とも叙述された。地域がそれぞれたどってきた歴史とそれを取りまく地理・景観（環境）と、そこに生み出されてくる人物を関連させて考察しようとしたのである。沢柳は「日本人」、「東北人」、「九州人」といった地域的人格論を提起しているが、横山も『新人国記』で「中京人」という名称で、濃尾平野という大平原に特徴をもつて歴史的に形成されてきた地域的人格論を縦横に論じた。彼の「中京人」論をここでは紹介してみたいと思う。

横山が『新人国記』を出版した前後の時期、名古屋では多くの高等教育機関が設立されてきていた。第十回関西府県連合共進会の開催に合わせて発行された『名古屋案内』という案内記には、高等教育機関として名古屋工業学校（一九〇五年開校）、第八高等学校（一九〇八年開校）、愛知県立医学専門学校（一九〇三年開校）、愛知県立工業学校（一九〇一年開校）、市立名古屋商業学校（一九〇一年開校）、私立明倫中学校（一九〇〇年開校）の六校が紹介されていた^②。博覧会の開催と高等教育機関の整備という時代状況のなかで、一人の評論家は将来の名古屋が「一大工業地」として発展していくためには教育こそ重要な課題だと強く主張していた。

第八高等学校と愛知県立医学専門学校は名古屋大学の前身校である。その設立時点での地域社会論はこれらの学校が地域のなかで設立されてくる背景を考えていく一つの材料となると考えられる。

一 明治の人物評論と横山健堂

横山は一八七二年（明治五）十一月五日山口県萩で生まれた。「健堂」はペンネームで本名は健三、また「黒頭巾」とも称した。萩中学・山口高等学校を経て、東京帝国大学国史学科に進学し、日本教育史を研究した。その

後國學院・東京専門学校・天王寺中学などで教職についた後、文筆活動に入った。横山の著作は『日本近世教育史』（一九〇四年）、『教育史余材』（一九〇八年）など教育史に関するもの、『大将乃木』（一九一三年）、『大西郷』（一九一五年）、『高杉晋作』（一九一六年）、『秀吉と家康』（一九一八年）などの伝記、『薩摩と琉球』（一九一四年）、『文芸地理東海道五十三次』（一九一一年）、『長周游覧記』（一九三〇年）などの紀行文が代表作としてある。『新入国記』も各地を遊覧しながら、地域の特徴とそこから輩出した人物を自由に叙述した著作である。

横山はほとんど忘れられた教育者・教育史家である。しかし人物評論というジャンルでは注目されたこともあった。一九七〇年に筑摩書房から明治文学全集の一巻として刊行された『明治人物論集』は、明治時代の人物評論をまとめている。そこには鳥谷部春汀・鵜崎鷺城・池辺三山・石川半山・山本亀城と並んで、横山の著作も収録されている。編集にあたった木村毅は解題で明治時代に生まれた人物評論というジャンルと、そこでの横山の位置について解説を試みている^③。

木村は明治時代には人物評論というジャンルは「立派に文学の一部をなしていて、人物評論家は堂々たる文士であり、あるいは一部世間で小説家以上に敬重されていた傾きもある」と述べるとともに、盛岡出身で、東京専門学校英語科を出て雑誌『太陽』の主筆も務めた鳥谷部がその代表的評論家だと評価していた。木村によれば、人物評論というジャンルは、中国の『春秋』や『史記』、水戸藩の『大日本史』、頼山陽の『日本外史』に淵源し、言論の自由を得た近代になってこれらの「古伝統」とは面目を一新したと、歴史的に位置づけられるものだった。「古伝統」の人物論や明治初年の田口卯吉や福地源一郎などの人物論はもっぱら故人を対象としていたが、明治の人物評論は同時代人を対象とした点で新しい性質を持っていた。

木村は人物評論が「文学的一形式」たるジャンルを獲得した理由として、封建制度が解体する過程で維新の三傑

のような革命児が出て、彼らに対する人間的興味がわき起こったこと、言論の自由が保証されて人物評論が可能となったことをあげた。さらに日清戦争を契機にして「人間的興味の拡大」が進み、また多様な新聞雑誌の発刊という出版状況もあつて、平壤玄武門の勇士・原田重吉や勇敢な喇叭卒木口小平のような下士卒にも及んでいったことも指摘した。

明治時代の人物評論家として、木村は『開国始末』（井伊直弼論）を書いた島田三郎、『吉田松陰』を書いた徳富蘇峰、雑誌『日本人』を主宰した三宅雪嶺などを先駆者として評価した。とくに徳富については「人物評論を以て文芸の一種に加へたる功労と、後進に与へた影響は、人物評論史に特筆すべきであろう」と高く評価した。そのほか木村は竹越与三郎・山路愛山・田口卯吉などについて言及しているが、「人物評論界で殆んど専売特許の観」があつたのが、主として『太陽』を舞台に政治家・外交家・軍人・記者・教育者・実業家などあらゆる分野の同時代人の人物評を行つた鳥谷部春汀であつた。

木村は鳥谷部につづく人物評論家として、鵜崎鷺城と横山健堂を位置づけていた。鵜崎はその主著書『朝野の大閥』（一九一一年）、『薩の海軍・長の陸軍』（一九一一年）で知られるが、後者では軍閥と日本の将来を予見したと木村は書き、政界に出入りして実際の知識をもとに人物評論を行つた「正統」的評論家だと評した。これに対して横山は、「いちじるしく面貌を異にして、文壇に登場した」と木村は言う。そしてその代表作が一九〇八年以来『読売新聞』に連載し、その後『日本及日本人』に続載した『新人国記』であつた。

二 『人国記』と『新人国記』

横山の『新人国記』と題する地域論の前身には、元禄時代に関祖衡が出版した『人国記』があつた。『人国記』は著者、成立年が不明であるが、十六世紀頃の成立だと推定されている。関祖衡はこれに序文・注釈を付け、元禄十四年（一七〇二）三月江戸で刊行した。『人国記』は日本各国の風土とそこに住む国人の氣質を評した書物である。

『人国記』は地勢と住民の氣質との関係について、おおよそ次のように説明している。要約した形で示しておく⁽⁴⁾たい。

人々の心情は植物のようである。土地によって繁つたり、枯れたりする。灌漑によつてもつて生まれた性質を
実現できる。肥えた土地の人々は才能が乏しく、痩せた土地の住民は粉骨碎身の労を尽くす。険しい山や奥深
い谷の住民は質朴で素直だが、度量が狭い。平原や海に面した土地の住民は文章や弁舌は達者だが、勝手気ま
までしまりが無い。こうしたことは皆、気候や水陸の地勢がそうさせるのである。ただし、そうした住民の善
悪、性質の厚薄は時とともに変化する。こうしたことを考えて、為政者は住民を感化して、風俗を正しくしな
ければならない。

住民はそれぞれ特有の地勢をもつた土地から生まれてくる。その土地の状況に応じて住民の性格は異なる。また
時代によつてその性格も変化する。こうした環境と歴史によつて生成され、変化する住民に対応していくことが政
治であつた。

『人国記』は尾張国について次のように記述している⁽⁵⁾。

当国の風俗は、進み走るの氣強くして、善を見ても悪を見ても、その方へ移り染まること速し、人の上を判ずるにも、一向に我が親しみを難んじ、人の善を消し、我が悪を掩ふの類多し、又万事根の遂ぐる事なく、徒に大風・洪水の俄になり出づるが如く、進むこと疾く、退くこと速やかなり、然れども形儀勇氣にして、厳しき所もあれば、伊賀・伊勢・志摩三か国合せても及ばざる上手なり、古より秀づる者もありと見えたり、下劣の心底猶以て頑ななり、それ故謀反、一揆を發すことも古今多し、また飾る氣すくなき故に、間に実義の人も出づるなり、又悪をなしても、早くこれを凝らして、改むる人もあるなり、然らば中の風俗の国といふべし、男の言語爽やかにして、よき国なりとぞ、

按ずるに、当国は南北長し、東西狭し、北は山にして、一国多く陸地なり、南は海浜相つづき、暖氣なる国なり、国民巧才なる所なり

「按ずるに」以下の文章が関のコメントである。尾張国の風俗は「進むこと疾く、退くこと速やかなり」と、状況に流されて動揺し、根氣よく事を処理することがない、実利的・表相的な特質をもつものだと評していた。関はそれを「巧才」というやや批判的な言葉で現していた。

横山は一九〇七（明治四十二）年九月から『読売新聞』紙上に「新人国記」を掲載しはじめた。その後いったん中断し、さらに『日本及日本人』で連載を続け、一九一一年五月に『新人国記』として敬文館書店から出版した。この『新人国記』は、京都・大阪・中京・上州・信州・常陸・大和の七か所を対象としたもので、この後残された多くの国（旧国）について論ずる予定であった。この書の序言で横山は次のように述べている。

吾輩かつて人国記を読み、そのよく簡明に全国の地方粹を描き出せるを見、すこぶる趣味を感じ、唯だ記述あまり簡略すぎ、物足らぬところあり、この書元禄時代の産物なるべし、その以後二百年世態変遷の激甚なる

振古未曾有なり、すなはち人国記の欠漏を補ひ、併せて近世に發揮せられたる地方粹を描かんことを試みたるが、この新人国記である

関の仕事は横山は高く評価していた。「簡明に全国の地方粹を描き出せる」書物だと見ていた。⁽⁶⁾二百年の時代の変遷を経た段階で、関の仕事を継承して「地方粹」を描くことを目ざしていた。横山はそれぞれの地方の「粹」、すなわち優れたところを、旅行しながら認識しようという作業を行っていた。

三 「中京」としての名古屋

横山の『文芸地理東海道五十三次』は一九一一年七月に刊行された。横山は東西両京の真ん中に位置する名古屋について、次のように書いている。⁽⁷⁾

名古屋は中京の言葉をもつて現はされる、中京の一語は関東関西の二大勢力の衝突点たることを現はし得て、此意味に於ては名古屋が中京たることは、昔も今も変りはない、東京の新聞と大阪の新聞との競争点は名古屋に於てする、中京に於ては雙方の新聞紙が常に突撃を以て争ひつゝある、それは吾々眼前のこと、又其委曲に至つては、既に名古屋の所に於て詳に、東西勢力の衝突点、混戦地たることを御話した（中略）馬琴も曾て江戸の小説は名古屋まで読まれ、上方の小説は亦名古屋迄に止まる、名古屋では東西の小説が読まれると言つた、それは平和の世、人文発展の上に於ける東西勢力の争が、此文学の上に現はれつゝある、遡つて関ヶ原・小牧は唯此二大勢力の衝突を具体的に弓矢を以て現はしたに過ぎない、其勝負は恰も小牧の戦の如く決勝が付かない、今日迄も引続いて戦争が行はれつゝある、具体的戦争は関ヶ原の一戦に勝敗が決つたやうである

けれども、それは一時の決勝であつて、引続き人文の二大勢力の争は永遠に此大平原に於て行はれつゝある、関ヶ原に於ては武運関東に幸ひしたるが、其後に於て文運関西に属して三百年の後、再び関東は関西に征せらるゝに至つた、関ヶ原の勝者たる徳川氏が倒れて明治の御代となり、昔の戦争的の競争は、形を経済的・財政的の競争に変へて、依然として中京の意味は名古屋に属して居る、名古屋を見て充分中京の繁華、中京の意義を玩味し得た旅客は、更に歩を転じて小牧の平原に行き、壮大なる雄麗なる無限の囑目の大平原に於て、具体的に行はれたる二大勢力の衝突点を遊覧することは、必ず興味が少くなかろう、それも名古屋から乃至枇杷島から車を駆れば、坦々たる砂道、此平原を縦断して木曾川の河畔に至る、誠に易々として二時間位の道路に過ぎない

ここから横山は小牧城跡、犬山城を巡歴している。横山はこうした中京の大平原のあちこちに残る戦跡を見て、東西の二大勢力の衝突の痕跡を確認した。この衝突は今も経済的、人文的分野で行われており、名古屋の現在の位置は「中京」として容易に認識できると述べている。

『新入国記』における中京編の主な項目を表1に示した。日吉丸（豊臣秀吉の幼名）、中京美人論、中京の景観、現代名古屋の人物（中村道太・吉田禄在・奥田正香・加藤高明）、中京の芸文化、名古屋の教育と学者文人（鈴木千七郎・鈴木朗・横井平洲）、戦国の人物と合戦などが詳細に叙述された。

横山がこの書においてもつとも詳しく論じたのが秀吉論であつた。秀吉を通じて現代の名古屋・中京を論じようとした。横山は秀吉の「雄大なる精神」が東西の衝突点にある中京・名古屋において、いかに現れているのか確認すべく冒頭から筆を進めはじめた。秀吉は「英雄の気鬱然として集る」結果生まれ出た人物であり、「中京は日本の中央の大平原」に「神州の精氣」が集まる地でもあつた。秀吉の「敢為遠大の気象」が名古屋（中京）人を鍛え

表1 『新人国記』「中京」の内容

節	項	目
1	中京平原の日出と日吉丸、日吉丸は御落胤也、日吉丸の威靈今如何	
2	英雄の出生地、日枝神社の樹下氏と秀吉淀君	
3	樹下氏に生源寺氏、中京平原に於ける東西二大勢力の衝突、金の鯨鯨と地方粹	
4	熱田神劍の靈氣と群雄、不実の梅と群雄、中村道太と国立銀行	
5	日吉丸小牧山城中の一段と名古屋、清正公と忠誠剛毅の人格	
6	名古屋城上の月明を憶ふ、龍宮城上の水晶灯、盆馴讚、中京の理想的美景	
7	中京の墾新田、横井氏と北条時宗、蘭丸と松坂屋	
8	中京の花、桜天神、花に迷へど金を忘れず	
9	柳薬師、一箇の名古屋繁昌記	
10	糸垂桜は中京美人を現示す、其中堂の店頭、黄白の強飯、蓋世の気を欠如す	
11	粹を以て生命とす、中京美人は浄瑠璃魂乏し、貞節解除の期也	
12	中京の春は解語花に在り、淀君の艶冶の気のみ存す、百花は売春婦、宝生院、勝間田稔と桜樹	
13	中京は女義太夫の名産地、出でゝ三味線入つては針線	
14	中京美人と養鶏、舞津は粹なる地方、梨瓜の風味	
15	謡曲と中京と宝生九郎、西村大蔵、金剛と宝生の接触地、綸言なれば嬉しくて	
16	吉田禄在と奥田正香、加藤重三郎、中京の人物、加藤高明	
17	名古屋の藩祖、近世教育史に於ける義直、坪内逍遙、上田万年、横井時冬	
18	伊藤圭介先生、長寿者と蕎麦と饅頭、九十七歳の老大家の起居、伊藤篤太郎	
19	明治教育と田中不二麿、理事功程、香奩体詩の御祖師、坊主と芸妓と相合傘	
20	春濤と槐南、城南の人物、菊如澹人、中京と後藤新平、新平と華山と長英	
21	中京と現代人物との関係、児玉大将中京美人に包圍さる	
22	奇才鈴木千七郎と水野越前守、木曾山林借上と大阪城拝借	
23	中京大平原の美観、百里練光寒景静、大工請負師と中京一流の建築、飯沼慾齋の草木図説、鈴木千七郎を記念せよ	
24	堂々たる大規模の精神、天保年間の二大立物、鈴木朗の学訓、八十年前中京の二秀才	
25	大塩平八郎の宗家、平八郎と中京、富士山、伊勢参宮、毅然たる大丈夫	
26	林崎文庫に於ける平八郎の献納書、気焰万丈、中京と細井平洲、嚶鳴館遺草と大西郷	
27	平洲と社会教育、民風と民富、中京に留与せる不朽の訓言、活如来	
28	平洲の山伏井戸、芥溜の鶴、平洲先生に敬意を表す	
29	平洲の学は王道、中京の地気と桶狭間一戦	
30	痛快なる桶狭間戦、信玄と三河武士、桶狭間の再演、雄大にして趣味深き鬼ゴッコ	
31	光秀と元就、信玄と信長、雪隠にありても、蘭丸の人格に	
32	中京と祇園祭礼信仰記、和中散の広告、松下嘉平治と朝鮮征伐、大阪湾を見渡して、朝鮮征伐を説く、天下茶屋と名古屋築港	
33	中京の工芸、松村八次郎、土井助三郎、中京の運命は一大工業地	

上げて中京の名を振るわせなければならぬと、横山は言う。しかし現実の名古屋は「美人国として艶笑」されるが、名古屋人の規模と活動は天与の地勢を生かしていないとする。名古屋城の金の鯨は「天下に壮たる」「中京の理想的美景」であるが、これを生み出した「忠誠剛毅の気魄」を育てることをゆるがせにしていると批評した⁽⁸⁾。逆に金の鯨の「黄金の気」が中京男児の気風の発達を阻害していると述べる。「中京は日本に於ける実利主義、寧ろ拜金主義の最大都会也」とも断言し、拜金主義の社会への浸蝕に注意を促したのである⁽⁹⁾。

横山の『新国記』は歴史・地勢と人物との相関性を探り出すという意図のほかにも、もう一つ別の興味深い観点をもっている。それは名古屋・中京という地域のシンボルの事物を紹介しようとしたことである。横山はその題材として「名古屋（中京）美人」と「名古屋コーチン」という二つを取り上げている。

「中京は美人国として殊に現代に雄姿す」と、横山は名古屋の芸妓を評している。名古屋の芸妓は垂れ桜に比している。東京美人は桜、京美人は柳、大阪美人は桃だと横山は書いている。こうした比較の内容はよくわからないが、中京美人のもつ「艶冶」さや「意気」が他都市と違うのだという⁽¹¹⁾。しかし中京美人は「余りに利害計算」に偏して、「詩的美」が備わっていないともいう⁽¹²⁾。

こうした中京美人と名古屋コーチン（養鶏）にふれて、横山は名古屋の「おきやーせ魂」がそこに現れているという奇抜で、独特な議論を展開した⁽¹³⁾。「おきやーせ」とは「およしなさい」、「波風を立てない」という意味である。自己を主張して相手と対立しないことであり、自己の領分を守りながら、そこに少しでも実益を得ようという生活観であった。名古屋美人は自宅を構え、家を出て芸をおこない、家では茶を嗜み、どんな賓客にも周章しない。こうした「世帯魂」は、庭に空き地があれば誰でも養鶏をするという風潮に似ているという。名古屋コーチンは明治初期に改良・飼育されはじめた鶏の品種であり、名古屋の近郊農村で飼育され、二十世紀に入ってその名は全国的

に有名になった。その肉と卵は美味で、廉価であり、多くが輸出された。「養鶏は極めてケチに之を取扱ふに非ずんば決して利益を見ず、中京人の養鶏に長ずるは中京氣質の万事を説明し得て、余蘊無きもの也」と、中京人の経済的実利主義の成功物であった。

また「名古屋建築」と「名古屋料理」も他の都市と異なつた特質をもつといふ⁽¹⁴⁾。木曾の優れた木材を使った建築が中京の大平原には存在し、その建物は「粹」であり、野暮ではない。また慎ましい菜食による「名古屋料理」も特色を持つ。

横山は「中京氣質」という言葉を使つて、郷土の歴史が生み出した偉人を評価しながら、「地方粹」を論じている。たとえば横山は中京人の欠点を郷土の偉人・信長の氣質のなかに見ている。「驕矜」さをもち、他人の短所ばかりを見て「長所に着眼して清濁併せ呑むの雅量」がない典型的人格を持つ人間として信長は評価され、この人格は「中京氣質の反面を代表する」と、横山は断じたのだ⁽¹⁵⁾。

横山は『新人国記』において、次のような「中京氣質」を指摘した⁽¹⁶⁾。

(ア) 「中京氣質は頗る伶俐を以て著聞す、忠義剛直の気風ある大人物を産出すること稀なり」

(イ) 「中京の長処は其の鋭敏にして細密なるにあり、聡明の点に於ては申出ある可らず、同時に驕矜なるところあり、其の才気は迸出す、而して些の閑雅の点はあらず」

(ウ) 「中京人は厚重の氣象を欠き、寛裕包容の度量無し」

(エ) 「中京の代表的人物を以て目せらるゝ者、眼一世を空しくして、而して事志に伴はざるものあるは、概ね寛裕厚重の襟度を欠くに因らざるはあらず」

(オ) 「中京の人は伶俐を以て勝さる、寛宏或は雄渾の人格を出すこと稀也」

横山の指摘する「中京人氣質」はかなり辛辣であることは確かである。「伶俐」、「驕矜」といった言葉は必ずしも肯定的なものではない。しかも「忠義剛直」、「寛裕」、「閑雅」といった人格性に欠けるとまで言っている。しかし、横山はこうした「中京氣質」について次のようにも述べている。¹⁷⁾

経済上より觀たる中京の位置、日に以て進む、中京人の氣風も亦た漸々それにつれて寛裕包容、天下第一流の景勝に盤拠するに耻ぢざる底のものとならざる可らず

横山は経済的發展がその地域の住民の氣質を変えていくのだと指摘した。そしてこの経済的發展をもたらす重要なテーマこそ教育の振興であつた。

四 中京の教育

横山は中京における教育の振興について、次のように述べている。¹⁸⁾

中京の富の要素、先天的に備はる。之を啓発し大成せしむるは、一に教育の力に俟つ。此の意義に於て、吾輩は輒近中京に於ける直轄学校の増設を喜ぶ、中京の盛衰は、天下の大勢に關係す。中京の教育大に振はざる可らず

直轄学校とは一九〇五年に設立された名古屋高等工業学校である。このことについては後述する。名古屋における学問的・教育的伝統を受け継いで、教育の振興を圖らなければならぬと、横山は考えていた。

地域の發展を支えるのは、それぞれの地域の歴史と地理（環境）が系統的に養成してきた人物であつた。横山は『新入国記』と同時期に著した『旧藩と新人物』の序言で、この点について次のように書いている。

地方新人物の輩出するは、自ら系統あり、地方の歴史、事情に本づき、人物も自から特色を帯ぶ、中には特出の一大人格あり、或は隠れたる郷賢の在る有りて、後進の新人物を養成す、而して地方の発展及び繁栄は、専ら新旧人物の系統的聯絡及び其の活動に待たずんばならず、這般の現況を明らかにし各人物の才幹事業を詳かにし、其の由来を考ふるときは、則ち維新前旧藩時人物養成の努力に淵源し、引きて今日に至るまでの關係を闡明せざる可らず

こうした考え方をもっていた横山は「隠れたる郷賢」の発掘とその事業を表彰しようとした。横山が特筆したのは蘭学者伊藤圭介と儒学者細井平洲という中京の二人の秀才である。伊藤圭介は「日本民族の誇とすべき」人物であり、「世界的学者」であつた。⁽¹⁹⁾ また横山は平洲に多くの筆を割いている。平洲への思い入れはきわめて深いものがある。

横山は平洲を貝原益軒とともに「近世の二大教育家」と評している。横山の平洲評を引用してみよう。⁽²⁰⁾

- (ア) 平洲の学説は一言すれば之を国民教育説ともいふべし、国家は国民を教育するの責任あるものと為す也
- (イ) 中京に於ける社会教育の木鐸は細井平洲也、勿論京阪に近きが為に、往事心学道話の勢力も亦た発展せざりしに非ずといへども、平洲の努力の大に振ひしに若かず
- (ウ) 平洲は教育を普及せんが為に、村落巡回講話の制度を設け、自ら率先して田舎に講説せり、彼の講説に巧妙なるは、蓋し徳川時代に於ける第一流を以て推さずんばならず、彼が巡回講話の要領は、民風を啓発し、民富を涵養するにあり、而して彼は人に対しては、忠恕あるのみといひ、事に対しては勇氣あるのみといふ、勇氣と忠恕、此の二字、平洲が中京に留与したる不朽の訓言たらずんばならず、中京人は須らく此の大先輩を造次も忘る可らず

平洲は尾張国知多郡平洲村（明治の町村合併後は上野村となる）に生まれ、京都・長崎に遊学、その後江戸で儒学を教授した。米沢藩の上杉鷹山に招かれ、興讓館で教え、つづいて尾張藩の明倫堂督学兼継述館総裁として学政上大きな影響を与えた。平洲の藩政改革へのもつとも大きな貢献は、農村を巡歴して農民教化を実践したことである。その教化の方法と内容はその後の模範となった。

横山によれば、平洲の顕彰は米沢では行われているが、「中京に余光を仰ぐ者多からず、吾輩中京の為に頗る之を遺憾とす」と書いている。しかし、一九一〇年の第十回関西府県連合共進会という近代産業の成果を展示するイベントが、平洲を再評価するきっかけとなった。

この博覧会は歴史的要素をその中に含みつつ開催されていた。そのことをもつともよく示すのは会期中に実施された時代祭である。それは信長以下郷土の偉人に扮した人々が名古屋市内を練り歩いた時代行列であった。

さらに名古屋では偉人講演会が開催され、現在の名古屋・中京の礎を築いた歴史的人物の社会的表彰が行われていった。横井平洲が再発見されたのもこの博覧会をきっかけにしているといつてよい。平洲を顕彰するために平洲会が設立されたのは一九〇九年九月のことだった。²¹平洲会は出身地の知多郡の教育会の事業として設立された。その設立趣意書には次のようにある。²²

先生カ儒林旺盛ノ時代ニ際会セラレ、濟々タル幾多ノ碩学大家カ盛ニ言議ヲ張り、滔々トシテ一世ヲ風靡シツ、アリシ間ニ介在シ、学識徳行共ニ一步モ他ニ譲ル所ナカリシノミナラス、普通一般ノ儒家ト迥ニ趣ヲ異ニシ、別ニ一家独創ノ卓見ヲ持シ、深ク天恵非凡ノ異才ヲ蔵シ、眼ヲ経済ノ方面ニ着ケ、意ヲ経世ノ事業ニ注キ（中略）史ヲ講スルモ詞章ノ末ヲ避ケ、実用ノ学ヲ尚ヒ、専ラ身ヲ修メ家ヲ斉ヘ、民ヲ治メ世ヲ濟フノ道ヲ教ヘ、邦家ノ為メ貢献セラレタル偉績ハ、茲ニ之を断言スルヲ憚カラス

こうした業績で誉め称えられる平洲は「人格ノ極致、師道ノ模範」として知多郡の誇りであり、平洲に敬意を表して日露戦争後の社会教育のモデルとしようとしていた。

平洲会の事業は、祭霊、遺物・書画の展覧、事蹟の収集、著作の刊行、細井家の援護、遺跡の保存、講演会の開催などだった。一九一一年十一月段階での会員数は名誉会員八人、通常会員一四二二人であった。名誉会員には侯爵徳川義親・伯爵上杉茂憲・内務大臣平田東助・愛知県知事深野一三らの名があった。

平洲会主催の教育展覧会は一九〇九年にはじめて開かれた。そして翌年関西府県連合共進会の開催期間中の六月三日から教育品展覧会・祭霊などの顕彰行事が、知多郡上野村の西方寺で挙行された。この展覧会の出品数は七三七点で、そのうち平洲の遺品は一一五点であった。六月三日の初日の観覧者は三二九九人に及んだ。翌四日には平洲を慰霊する神道祭典が上野村の第二尋常高等小学校講堂で執行された。この年は平洲没後一一〇年祭に当たっていた。

この日内務大臣平田東助は平洲の生誕地を訪れ、その足で祭典会場に臨み、「米沢に於ける平洲先生」と題した講演を行った。平田自身は米沢出身であり、また日露戦後の地方改良運動の指導者であったこともあり、地元での平洲会の事業に賛同の意思を示していた。平田は平洲が米沢の学校を再興に尽力し、また尾張藩でも教育の振興に貢献したことを評価した。⁽²³⁾

横山もまた六月四日の平洲一一〇年祭の記念行事に招かれ、「平洲先生に対する感想」と題した講演を行っている。⁽²⁴⁾ おそらく横山の『新人国記』で平洲論を展開したことがきっかけとなったことだろう。横山は平洲の『嚶鳴館遺草』の内容、政治学者としての役割、貝原益軒と対比できる教育家としての位置などを論じ、「思想界の革新者」であったと結論した。横山は平洲を近世思想家のなかで熊沢蕃山に匹敵しうる人物だと見なしていた。横山は平洲

が「学校を盛んにし、而して一般の人民を教育して生産力を増加する」ことに尽力した「實際的為政家」だと結論している。

横山はこの講演の最後に平洲の教育論を引いて、このように締めくくった。

人を育てるには菊造りの菊を作るやうな事はいかない、教育は必ず大根を作るやうでなければいけない、菊作りは自分の注文通りに合はぬものは、一本たりとも残す事を許さないで、刈棄て、自分の思ふ通りの花だけを残すのである、教育はさうでなく大根のやうに作らねはならぬ、夫れは大小もあらう真直なものも、曲つたものもあらうが、兎に角大根には総てなる、一方大切な肥料を施して無益には棄てない、総てを大根にする、さう云うやうに育てる事はありたい

五 一大工業地としての中京

横山は中京の将来像として「一大工業地」への発展を展望している。これまでの中京の産業として陶磁器業や時計産業、木綿織物を取り上げている。とくに陶磁器業については、松村八次郎の手で半磁器が開発されたことによつて、欧米からの磁器輸入が防止されたことを特筆している。⁽²⁵⁾横山は東京職工学校（その後東京高等工業学校となる）出身の松村の「創製の力」を高く評価した。陶磁器にしる、時計・木綿織物業にしる、いずれも江戸時代以来の瀬戸物、七宝焼、鳴海絞などの技術的伝統のうえに、有為な人物が「創製の力」を発揮して新しい製品を創り上げたことに、横山は注目していた。こうした中京における工業の展開をふまえて、横山は中京の将来を次のように述べた。⁽²⁶⁾

近年中京に名古屋高等工業学校建設せらる、此学校の特色は染織物、特に木綿織及び鍛冶科に重きを措く、聞く、輓近中京の染織業者続々其の製品を提出して、試験或は鑑定を請ふ者、踵を接し、殆んど学校をして応接に違あらざらしむといふ、此学校や経済上より見たる中京の運命に対して、実に甚大なる影響を有するものならずんばならず、学校長土井助三郎工学士也、頭脳明晰、年壮にして有為の資あり、工業教育家中特観の材也、蓋し中京の工業に貢献するを期待するに足るものあらん、中京の運命は遂に一大工業地たらざる可らず、此中京の天職也、而して中央の大平原に盤踞せる中京は、吾工業界の覇者たるの覚悟恐らくは存する無くんばあらざるべし

名古屋高等工業学校は一九〇五年三月二十八日の勅令第九十六号により文部省直轄学校として設置された。⁽²⁷⁾ 文部省は高等工業学校の増設を計画しており、第四高等工業学校の設立費用を第十六帝国議会に求めていた。これが認められ、愛知郡御器所村に用地を求め、一九〇三年九月に工事が始まっていた。そして一九〇五年四月二十五日土井助三郎が学校長に任命され、九月一日に授業が開始された。土木・機械・建築・機織・染色の五科の専攻を有し、修業年限は三年、学生定員は三〇〇名となっていた。開校の時点での学生数は、土木科三〇人、建築科二〇人、機械科一五人、色染科一〇人、合わせて七五人だった。

横山はこの学校が将来の中京地域の発展に大きな役割を果たすのだと確信していた。中京地域が「一大工業地」として日本の工業界に勢力を伸張するための基礎として、この学校の設立に期待していたのである。当時文部省の直轄学校は二十九校あった。東京・広島の高師範学校、東京・神戸・長崎・山口の各高等商業学校、第一から第七の高等学校、千葉・仙台・金沢・岡山・長崎の各医学専門学校、東京外国語学校、東京美術学校、東京音楽学校などが、直轄学校であった。高等工業学校は東京・大阪にあり、また京都には京都高等工芸学校があった。そし

て名古屋高等工業学校は第四番目の高等工業学校として設立された。

横山は「中京の運命」を担う役割を名古屋高等工業学校に期待した。その自覚は学校側にもあった。そのことは校友会が作詞した「開校記念日の歌」によく現れている。⁽²⁸⁾

- 一 鯨の光の爛きて、尾張の空に聳ゆれど、見よ東に雲排す、我学舎の壯観を
- 二 開校すべき時は来ぬ、三百人の友よいざ、震天動地の声あげて、共に祝はん此の日をば
- 三 富国の道を講ずべく、君工業の旗をふれ、世界の友を利せむため、我工芸の太刀佩かむ
- 四 あゝ蓋世の秀吉が、覇凶の思をしのびつゝ、四海に遠く船出して、自己の務に励まなむ
- 五 希望の光あふれたる、亜細亜のはての日本国、国の光は之よりぞ、いや輝かん之よりぞ

この校歌は高等工業学校こそが名古屋を工業化を実現し、さらに日本を亜細亜になかで輝かせていく義務を負い、そうした抱負は豊臣秀吉という名古屋が生んだ歴史的英雄の壮大なる意思を受け継いでこそ実現できるという意思を込めていた。

関西府県連合共進会の開催中に挙行された歴史祭典、名古屋開府三百年祭について、四月十二日の『名古屋新聞』は「開府三百年」という記事を載せている。「維新後に在りては商工の都市として、其進歩発達隆々恰かも旭日の天に沖するが如く、其の発展の急速なる既に京都を圧して將に大阪を凌がんとす」と、この記事は書いた。そしてこうした発展の途上にある名古屋の現状を創り上げたのは、三百年にわたる人物の養成、教育的実績によるのだと論じた。そして名古屋の三百年の発展に淵源にあるのは、尾張藩の開祖・徳川義直の威徳であるとした。将来の名古屋の進歩発展を実現していくために、その歴史的起源に位置する功労者へ敬意を尽くすことを求めたのであった。

むすびに

日露戦後の名古屋の産業の発展、都市化の進展のなかで、将来の名古屋の政治的・経済的な方向性を模索すべく名古屋論を闘わせる状況が生まれていた。横山の『新人国記』もまた、二十世紀初頭の名古屋論としてきわめて重要な文献の一冊である。この時期名古屋には高等教育機関があいついで創設されていった。横山は名古屋の歴史と現状をふまえてさまざまな提言をおこなった。最後に横山の名古屋への提言の一文を掲げておきたい。²⁹

名古屋の藩学、記録に拠れば慶応以後諸般の武技を設くと雖も、多く他流試合を禁ずといへり、それには相当の理由もあるべしといへども、他流試合を為さざる武術に世界的大成するものあるべき理無き也、吾輩が中京に期待するところは、其の地勢に伴ふ堂々たる大規模の精神の発揚ならずんばならず

こうした横山の期待に込めてきた人物が江戸時代の名古屋にいないわけではなかった。横山は天保年間に活躍した「進取的世界的」な人物として、尾張藩家老で財政整理と木曾山林の保護に尽力した鈴木千七郎と、明倫堂教授で国学に成果をあげた鈴木朗を高く評価した。³⁰ 彼らの進取性と世界性を伝統として受け継ぎながら、横山は中京の教育の発展を期待し、大平原に盤踞する工業都市化した中京を展望していたのである。

注

- (1) 横山健堂『旧藩と新人物』（敬文堂、一九二一年）への沢柳の「叙」。
- (2) 『名古屋案内』名古屋開府三百年記念会、一九一〇年、三八―四三頁。

- (3) 木村毅「解題」『明治人物論集』筑摩書房、一九七〇年、三七七―三九一頁。
- (4) 『人国記・新人国記』岩波書店、一九八七年、二八〇頁。
- (5) 同右書、一二二―一二五頁。
- (6) 「序言」『新人国記』敬文館書店、一九二一年。
- (7) 横山健堂『文芸地理東海道五十三次』前川文栄閣、一九二一年、一二九―一三一頁。
- (8) 『新人国記』二〇〇、二〇三頁。
- (9) 同右書二二三―二二四頁。
- (10) 同右書一九八頁。
- (11) 同右書二二二―二二四頁。
- (12) 同右書二一六頁。
- (13) 同右書二二二―二二六頁。
- (14) 同右書二一五頁。
- (15) 同右書二七七頁。
- (16) 同右書一九七、二四七、二七七―二七八頁。
- (17) 同右書二七八頁。
- (18) 同右書二五七頁。
- (19) 同右書二三五頁。
- (20) 同右書二六三―二七〇頁。
- (21) 以下、平洲の顕彰については、『平洲先生事蹟講演集』愛知県知多郡教育会附属平洲会、一九二一年による。
- (22) 同右書三二頁。
- (23) 同右書五一六頁。

- (24) 同右書八―一八頁。
- (25) 『新入国記』二八四頁。
- (26) 同右書二八五―二八六頁。
- (27) 名古屋高等工業学校編『名古屋高等工業学校一覽』第一冊、一九〇六年、一頁。
- (28) 蘭汀書院編『学校歌集』奉公会、一九一〇年、四三頁。
- (29) 『新入国記』二五四―二五五頁。
- (30) 同右書二四七―二五六頁。

(はが・しろうじ 大学文書資料室)